

書評：施恒著『英語化は愚民化 日本の国力が地に落ちる』（東京：集英社新書 2015年7月，254p. ISBN978-4-08-720795-8）

佐藤，慶治
九州大学大学院比較社会文化学府音楽文化学専攻：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1954835>

出版情報：総合文化学論輯. 4, pp.39-41, 2016-05-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies
バージョン：
権利関係：

書評

施 光恒 著『英語化は愚民化 日本の国力が地に落ちる』
(東京：集英社新書 2015年7月, 254p. ISBN978-4-08-720795-8)

佐藤 慶治

「愚民化」や「地に落ちる」という言葉を含んだ刺激的なタイトルの本書は、決して英語教育全体を否定する論考ではなく、政治学者である著者が、政治主導で日本全体が「英語化」することの「愚」かしさを論じたものである。現在の日本では、2013年2月に発表された「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」や、大学を核とした「グローバル人材の育成」などの政策が行われ、民間でも楽天やユニクロの英語公用語化などの動きがあり、正に官民一体となって「英語化」が推進されている。著者は「英語化」を推進する勢力(グローバリストや新自由主義者たち)に対して、複数の視点から論理的な根拠をもって批判を行っており、「英語化」という現代日本の問題点に基づく学究的な論考と言えよう。

本書を大まかに分けるならば、現在の日本を覆う「英語化」政策の数々が列挙され、「時代の流れ」や「歴史の必然」という言葉で正当化されたグローバル化の文脈における「英語化」について問題提起が行われている第1章、近代化における「翻訳」と「土着化」の役割を論じ、「英語化」を中世への逆行と位置づける第2・3章、民主主義におけるネイションや「国語」の意義・役割を論じ、「英語化」を新自由主義・グローバル化と結びつけた上で、「犠牲にされる国民生活」など民主主義の観点から見た「英語化」の問題点を導き出す第4・5章、「思いやりの道徳」など「英語化」によって破壊される日本の「良さと強み」を論じ、今後の日本が向かうべき国づくりの展望を考察する第6・7章となるだろう。

本書における議論の重要な基盤となっているのが第2・3章である。第2章では「グローバル化=英語化=進歩」なのかという疑問に基づき、近代における「翻訳」と「土着化」の役割を論じている。カトリック教会が支配する中世のヨーロッパでは、学術的な「知識」がラテン語のみで記されており、「知識」はラテン語を話せる聖職者すなわち一部のエリートたちだけのものになっていた。しかし、ルターより始まる宗教改革において、「知識」が「普遍語」(ラテン語)からそれぞれの国の「土着語」に「翻訳」され、「狭い知的世界に閉じ込められていた庶民が、高度に知的な事柄を学び、語ることができる」(p. 54)ようになり、それがヨーロッパ社会全体の活性化を促し、近代化へと結びついた。よって「土着化」こそが進歩であり、「グローバル化=進歩」という見方は正しくない。むしろ「英語化」が

推進されることで学術書や公的文書などの「知識」が英語のみで記されるようになり、中世ヨーロッパ社会のように「普遍語」(現在は英語)を話せるエリート層と、「土着語」(日本語)のみを話す庶民との間の知的格差が拡大することにつながるのである。「日本の社会が英語化してしまえば、多くの人々が社会の重要な場から締め出され、知的成長の機会を奪われ、愚民化してしまう」と締め括られる(p. 66)。

第3章では第2章の議論を踏まえた上で、明治期の日本における「英語化」政策をめぐる諸相が描かれる。開国直後の明治期においても、文部卿の森有礼を中心とした「英語化」の動きがあり、何と「英語公用語化」という案まであがっていた。しかし、福沢諭吉ら当時の知識人が、「英語化」が推進された日本における格差拡大等の懸念を表明し、「母語の役割をめぐる議論を経て、むしろ翻訳の努力によって日本語を豊かにし、近代国家の基盤たる「国語」として整備していくという道」が選択された(p. 91)。更に言えば、そのような道を経る中で、近代以降の日本人のアイデンティティが生まれてきたのである。

後書きに記されているように、本書では「外国語の能力に優れた者が外来の智を積極的に学び、『翻訳』することの重要性」(p. 238)が各所で論じられており、本書は「英語化」を中心とした国づくりへの対抗策として、「翻訳」を中心とした国づくりを提唱している論考と見なせる。少々長い引用になってしまうが、第6章では「安定した社会的・文化的基盤を守りつつ、それを壊さずに外来の知(外国の文化や思想、制度など)を主体的に選別・変容し、うまく取り入れてきたことに日本の良さの多くは由来する」、「外来の知を、日本社会に合うように土着化(日本化)し、一般国民になじみやすいものとし、多くの人々が近代化の果実を格差なく享受できるようにしてきたところに日本の国づくりの強みが見出せる」として(p. 198)、「翻訳」と「土着化」こそが日本の「良さと強み」であると結論付けられる。文脈からしてここにおける「翻訳」は、「言語間のテキスト訳出」という意味のみならず、文化人類学における「文化の翻訳」などの意味合いも内包されているだろう。

これは本書に記述されていることではないが、例えば現在の日本における学校制度は、明治以降にフランス等の先進国における制度を模倣して形成され、それがこれまでの150年間で様々な過程を経て「土着化」していったものである。具体的な教科についても、「音楽」などはやはり明治期以降に西洋を模倣して制度化され、賛美歌・民謡などの西洋音楽が唱歌として「土着化」することにより形成されてきた。スコットランド民謡の *Auld Lang Syne* が、現在の日本では唱歌《蛍の光》として、すっかり「日本の歌」の地位を確立していることを挙げたい。また、もう少し実生活に根ざした部分では、例えば現代日本の食卓にはコロッケやカレーライスなど多様な「洋食」が並ぶが、これもやはり明治以降に取り入れられてきた外来の知が「土着化」したものである。これによって現代の我々は非常に豊かな食文化を享受している。この他にも現代日本の社会制度や文化には西洋から輸入され「土着化」によって根付いたものが多く見られる。これらは単純な「西洋化」ではない。

著者が指摘する「翻訳」と「土着化」に基づいた「日本の強み」は、多くの識者たちが様々な表現で言及している。例えば比較文学者の芳賀徹は次のような指摘を行っている。

日本の文化史をみてみますと、すでに古代から、中国やインドのものを、漢文、漢詩、あるいは仏教というかたちで取り入れてきたわけですが、その過程では必ず一種の翻訳が行われていました。徳川の蘭学の時代もありましたし、明治以降はいうまでもなく、政治、経済、哲学の問題から文学の表現まで、一斉に、すべて翻訳を通して西洋の文化を摂取してきました。〔中略〕ことに、日本の文化史上、大きな変換期を迎えたときには、いつも翻訳が非常に重要な役割を果たしてきたのです。¹

この指摘において重要なことは、芳賀の言う「一種の翻訳」が、必ずしも「言語間のテキスト訳出」の意味のみならず、「文化の翻訳」を含めた広義の「翻訳」を示しているということである。芳賀が挙げている中の例えば仏教では、主として中国大陸を通じてブッダの教えが受容され、日本においてはいわゆる「十八宗」の形で「土着化」した。このようなことを踏まえて芳賀は、「翻訳の文化史こそは、まさに日本文化史²」と結論付ける。

「翻訳」と「土着化」を通じて現代日本の社会・文化・言語は形作られてきた。であるからして、「英語化」はそれに逆行し、むしろ破壊する可能性を持っているという著者の指摘は全く正しいものである。著者は第7章において、このような「翻訳」と「土着化」を中心とした国づくりをもう一度見直し、更には他国における「翻訳」と「土着化」を日本が支援することにより、アメリカ主導のグローバル化路線と対抗する「棲み分け方の多文化共生社会」を目指すべきと論じる(p. 233)。そうした世界であれば、確かに文化は更に多様性を増し、更に近代ヨーロッパがそうであったように、世界に生きる人々は母語の下で活動できるようになって、活力を取り戻すであろう。本書はそのような「翻訳」と「土着化」の意義を論じているという点で、文化学や言語学の観点から見ても有益な論考である。

以上、限られた紙幅で、本書の魅力を十分に書き尽くせていないが、本書の議論の基盤である「翻訳」と「土着化」を中心として本書の意義・魅力を語った。もちろんこれ以外にも、著者の本分である新自由主義・グローバル化への批判や保守主義研究の要素が多分に含まれており、このようなことに関心のある方々に広く読まれることが望まれる。

[Book Review: SE Teruhisa, *Anglicization Makes People Stupid : Neo-Liberal Linguistic Imperialism and the Fall of Japanese National Power*]

[Sato, Keiji · 九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程・音楽文化学専攻]

¹ 芳賀徹編『翻訳と日本文化』（山川出版社、2000）pp. 152-153.

² 前掲書 p. 153